

— 個人事例 —

ことばの障害にアプローチしていった実践

友だちの中で、いきいきと活動する子をめざして

倉 真理子

はじめに

A子は、今年4月に入学してきた1年生。公立の保育所で、2年間を過ごしてきていて、集団の中で生きる術を知っている子という印象を持った子である。意欲的に自分の思ったことを伝えようとする。人がする大抵のことは、「自分にもやらせて」と名乗りを上げる。しかし、一度手をつけると、そのことだけで満足してしまい、興味を失ってしまうことが多かった。また、自分ではできないと決めて諦めたり、自分でするといって人の言うことが聞けなかったりする子であった。

さらに、もやもや病の後遺症のため3歳迄は、正常であった言語の発達も後退し、数語の単語を発語するに留まっている。

このようなA子にとって、社会自立とはなにか、コミュニケーションの力をつけるとはなにかを模索しながら、行ってきた本年度の実践について述べてみたい。

1. プロフィール

(1) 生育歴

- ・昭和61年4月30日生 7歳7か月 小学1年 女子 ウィリス動脈輪閉塞症（もやもや病）
- ・正常分娩 体重3,004g 首のすわり3か月 歩行12か月 3歳迄は正常発達
- ・3歳脳毛細血管がつまり、手足が動かなくなる。
3歳8か月もやもや病と診断される。
3歳9か月 脳の血管のバイパス手術を行う。
- ・家族構成は、祖母、両親、2歳年上の兄の6人で、本児が中心の家族になっていて本児の主張は大抵のことが通る。

発達年令	0	1	1	1	2	2	2	2	3	3	3	4	4	4
項目	0	1	1	1	2	2	2	2	3	3	3	4	4	4
移動運動	1	4	6	9	0	3	6	9	0	4	8	0	4	8
手の運動														
基本的生活習慣														
対人関係														
発語														
言語理解														

(2) 諸検査による実態

遠城寺式検査では、左の図のように、移動運動は、4：0歳と他と比べて数値が高い。手の運動の数値が低いのは、左手に軽い麻痺があることに起因していると考えられる。

遠城寺式乳幼児発達検査 (H5.4実施)

(3) コミュニケーションに関する実態

- ・「カーヤン（お母さん）」「トーヤン」「バーバン（祖母）」「テンテイ（先生）」「マンマ（食べ物の総称）」等、名詞を中心に10語程度の発語を持つ。また、特に伝えたい事柄について本児がつくり出したジェスチャーを持っている。例えば、外へ遊びに行こう、給食に行こう、



同じだね、プールに行こう等である。前頁の絵は、プールに関することのジェスチャーであるが、これは同時にお風呂や水遊びについても同じ動作で表し、ジェスチャーが未分化である。理解言語については、普段の生活の中での簡単な指示は、理解し従うことができる。

- ・ 本児のコミュニケーションの機能について見ると、道具的機能と相互関係機能が強く、意欲的に伝えようとする。しかし、その他の機能は、あまりみられない。

(4) 行動特性

このようなA子の行動特性をまとめてみると、

- ・ 伝えたい、やりたいという意欲はあるが、中枢性の疾患のため言葉がでにくかったり、技能が伴わなかったりして、諦めてしまうことがある。
- ・ 自分のやりたいことを自分流にやってしまうことが多い。
- ・ 集中して取り組んだり、それを楽しんだりすることができにくい。

といえる。そこで、12年間の一貫教育の1年目として、以下のような取り組みを考え実践していった。

2. 取り組みの構想

個人目標 友だちの中で、いきいきと活動する子

つきたい力 ・ 基本的な生活習慣 ・ 手指の力を基とした物と関わる力
・ 言葉や音楽、動作等の表現する力

このような力をつけていくなかで、集中力、持続力、模倣する力をねらいたい。

コミュニケーションに視点をあてた取り組み

— 仮説 —

自分の思いを伝えたいという強い意欲を持ち、数少ない発語や本児が考案したジェスチャーや指差しをフルに行使して、コミュニケーションを図ろうとしている。そこで、

- ① 教師が共同生活者として、本児と共感できる生活を共有し、また家庭との連携をとりながら本児の伝達の意図や内容を把握することによって、コミュニケーションの楽しさを知らせ、コミュニケーションの意欲をさらに高めていく。
- ② 本児の障害に起因して、発語や微細な動きを伴ったジェスチャーや図形を使ったサイン言語等の導入は難しいが、本児なりのジェスチャーを持ち、また自分の名前が判別出来ることから、不可能ではないと思われる。特に、発語と同時に提示していくマカトン法（手指の形や動きで言葉をサインとして表し、意味を伝えようという手指法）は、本児にとって有効であると考え、導入していく。
- ③ 本児の気持ちを言語化し、代弁していくこと（パラレルトーク）によって、内面的な育ちを目指していく。

以上のような取り組みを行っていくことによって、本児のコミュニケーションの力を伸ばしていくことができると考えている。

めざすコミュニケーション像

サイン言語を使いながら、自分の言いたいことを伝えることができる子

つきたい力 共感する楽しさ 生活体験に基づいた伝達の意欲 模倣する力

指導方針

- ① 教師がよき共同生活者となって、できるだけ楽しい生活を共有できるように努力していく。
- ② 本児の興味や関心や今できていること特に今持っているジェスチャー等を大切にし、指導の手掛かりにしていく。
- ③ 段階的に指導の目標を持ち、次の段階への移行を焦らずゆっくりと時間をかけながら、行っていく。

第1期（5年4月～7月） 指導を受け入れられるラポート作りと模倣のレディネス作り

第2期（5年9月～12月） 学習への取り組みの姿勢作り

第3期（6年1月～） 個別指導を中心として、マカトン法の導入

1期はクラスの生活や学習の中で個別に配慮しながら指導し、2期は個別指導も取り入れていく。

3. 指導の実際

(1) 第1期（5年4月～7月）

方針 この時期には、児童の実態の把握と生活の組み立てを行った。その時の指導者の態度としては、受容的に接しラポートをとっていくことを主としながら、指示が受け入れられる土壌づくりも行っていた。

実践とその様子

日常生活の指導 …本児は、生活や学習に対して大変意欲的に取り組んでいくというよさを持っているが、その反面、自分でできないと判断すると全く挑戦しようとしなくなってしまふ。また、困難なことにぶつかったとき、大人の援助が得られると分かると任せてしまい、学ぼう真似ようという姿勢が乏しい。そこで、学校生活で必要不可欠でしかも繰り返し行っていく日常生活の指導を中心として、「指導者と一緒に〇〇をする、真似て〇〇をする」という態度を身につけていきたいと考えた。

着脱…左手を使って、左のスナップを支えることを指示すると嫌がり、手を引っ込めてしまった。手を出すように言っても拒否する。また、脱いだ上着が裏返しになっているので、左手で服を持って右手を袖に入れることを指示したが指導者に任せて自分は手を引っ込めてしまう。「できない」と訴えらるともう自分はしなくてもよいと思いこんでいるような態度が見受けられる。そこでまず、指導者が主として行っても本児に手を添えさせ、自分も参加していることででき上がった状態を知らせた。それとともに一緒にできたことを褒め喜びあった。その後、指導者の援助を少しずつ少なくしていった。まだ、一人で着脱したり後始末したりすることはできないが、指導の手を拒否することは、なくなってきている。

給食…小食で、嫌いなものには、全く手をつけないという傾向がある。食わず嫌いで始めから拒否していることもあり、

給食の場面でも、嫌だけど少しは頑張ってみようという姿勢を身につけさせたいと考えた。そこで、「これだけ」とめあてを持たせ、励まし、できたら褒めるという指導を繰り返した。まだ、好き嫌いは多いが、指導を受け入れて少しは、頑張ってみようという態度も見られるようになってきている。

朝の会…朝の会は、手遊び歌から続く朝のあいさつの歌、「おはよう」という発声、日にち調べという流れで進めている。手遊び歌は、「にぎってひらいて」と「とんとんとんとんひげじいさん」の歌である。ここでも、自分は得意ではないと思い込んでいるので、ほとんど手を動かそうとしなかった。指導者が促せば、手を動かすが身体意識がなく真似たり言われたところに手を持っていったりすることは、難しかった。おはようの歌に合わせて、発声することはできたが、音としての切れはなく長音を発声していることから、言葉としての意識はほとんどないと思われた。

生活単元学習…この学習では、本児の気持ちを大切に、できるだけ受容的に接してきた。具体的には、作品のできにかかわらず、本児の意図をくんで指導者が意味づけをし、取り組み態度を賞賛して、取り組んだ喜びを持たせるようにした。また、調理や発表等の好きな活動を多く取り入れた。

5月…「おかあさん」の単元で、ホットケーキやカレーライスづくりを作った。カレーライスは、子どもたちの好きな食べ物であり、皮をむく・切る等の作業ができやすくそのできばえを問われないことから、適した教材であった。特に本児は、調理を好み家庭でも積極的に調理に関わっている。この題材を通して、友だちや指導者と一緒にカレーライスを作ったという喜びを持つことができた。そしてその結果、家に帰って、身振りや手振りでカレーづくりを知らせ、また、学校でも「またしよう」と訴えた。さらに、本児が集中力を養える恰好の題材だったと思われた。

7月…保護者を呼んで1学期の成果を発表するたなばた発表会を行った。本児のクラスでは、絵本「ぐりとぐら」の劇発表で、A子はうさぎの役を演じた。おかあさんや他のお客さんに見てもらうことで大変意欲的で、大きな声で台詞を言ったり、踊ったりした。発声したり真似たりすることに苦手意識を持たずに、発表することができた。本児の意欲づくりに適した題材であった。



カレーライスづくり



たなばた発表会の劇発表

第1期の様子と第2期への展望

嫌だからしないとか私にはできないからしないという態度が少しずつなくなり、指示を聞いたり援助を受けたりしながら、やろうという態度が見え始めた。その結果、本児の実態が把握でき、課題も明確になってきた。模倣は、常に指導者の目標としてかかげていきたいが、本児の形の認知の難しさから、それのみを指導していくことは有効ではないと判断した。そこで、次の学習への姿勢づくりの第2期に進むことにした。

(2) 第2期 (5年9月～12月)

方針 指示を受け入れることを嫌がらなくなったこの時期に、さらに受容的に接しながら、学習の取り組みの姿勢作りを行っていった。実践の場は、第1期と同じで、各指導形態で行ったが、ここでは、個別の時間の指導を中心に述べていきたい。

実践とその様子 **個別の時間の指導** (パズル遊びを中心として)

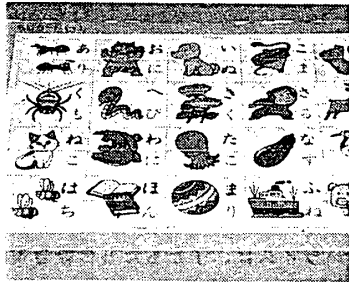
このパズルは、少し難しく適した教材ではなかったが、ちょうどクラスの友だちがしていて、本児も興味を持っていたので、①指導者の指示や援助を抵抗なく受け入れること ②部分的な2枚のピースを合わせて、一枚の絵にすること(写

真1) ③ 絵を見て名前を確認したり2音でできた名詞を言ったりすることを目標として取り入れることにした。

1学期は写真2のように、パズルのピースを積み上げて台紙に載せ、「できた」と満足していた。1学期の間は指導者もこの作業を本児の遊びと捉える受容的な態度で接し、共に遊ぶこともあった。

2学期になってもその興味は継続していたので、1つの絵になる2枚のピースを提示し、合わせることから始めた。また、方向が間違っているとき、「くるっと回して」というような言葉かけをしていき、できたという状態やできたという喜びを持たせるように努めた。猫や犬を好み、その部分では特に嬉しそうに合せていた。

まだ、一人ではできないが、全体的にはめ込んでいく喜びを持つことができている。



パズルの全体と一部分



1学期の様子



援助を受けながら取り組むA子

この取り組みによって、指導者を独り占めできているという満足感から情緒が安定し、指示も受け入れやすい状態になっている。そして、他の場面でも、さっと指示を聞くことができるという変化も見られるようになった。また、着替えて体操服を着るとき、よく後ろ前に着るので、正しく着れるようやり方を教えるために「くるっと回して」という指示をするが、その指示の意味が分かった。

第2期の様子と第3期への展望

学習に意欲を持って臨み、着席や作業の始めと終わりの区切り、作業に集中して取り組む持続時間、学習の指示に従うこと等の学習の取り組みの姿勢ができてきた。そこで、第3期として、個別学習を中心としながらマカトン法の導入や図形のカードのマッチング等の学習を取り入れていく。

4. 反省と今後の課題

第2期を終えた今、指示を受け入れることによってできることが分かってきて、指示を受け入れることを嫌がらなくなってきた。今までの指導について振り返ってみると、伝達の意欲があり、ごく少数ではあるが発語やジェスチャーによるコミュニケーションの手段を持っている本児に、この意欲を高め、手段の技術の向上を図ることはもちろん大切なことではあるが、本児の障害から見て、急速な向上は期待できず、指導の効果もあまり上がっていない。これは、長い目で見ながら時間をかけて指導していかなければならないと考えている。しかし、言葉で自分の気持ちをコントロールしたり思考を高めていったりすることは、発語やコミュニケーションの手段の指導と同時にしていかなければならないと考えている。本児の中では、かなり自己内対話が行われていると推測できるが、言語的な表出が少ない。そのため、そばにいる大人が気持ちを察し、言語化したり、共感したりしていくことが必要である。

コミュニケーションの直接の指導にだけ目を向けずに、より充実した生活を送っていくこと、その中でいろいろな技能や集中力や模倣する力を高めていくことが、ひいてはコミュニケーションの力を高め、社会的自立に近づいていくと考えている。